

山代神楽と ひらこし支神楽



2015年
6月21日(日)
 14:00開演 (13:30開場)
周東文化会館
 (パストラルホール)

出演 / 演目

- ◆ 釜ヶ原神楽団 ・ 恵比寿 ・ 大江山
- ◆ 宮乃木神楽団 ・ 滝夜叉姫 ・ 八岐大蛇

【入場料 (全自由席)】

一般	前売2,000円 (当日2,500円)
友の会会員	前売1,800円 (当日2,250円)
高校生以下	前売1,000円 (当日1,500円)

主催: 周東文化会館
 後援: 岩国市教育委員会 / 玖珂町文化協会 / 周東文化協会 /
 岩国市連合婦人会 玖珂支部・周東支部 / 社会福祉協議会 玖珂支部・周東支部 /
 周東町自治会長連絡協議会

チケット発売所

- 周東文化会館
- 岩国市教育委員会各支所
- 周東町各公民館
- スターピアくだまつ
- ローソンチケット (Lコード: 68739)
- 岩国市役所 生涯学習課 (4F)
- 都野書店 ゆめタウン南岩国店・柳井店
- 光市民ホール
- 周南市文化会館

チケット発売日

友の会会員: 5月14日(木) (周東文化会館のみ)
 一般: 5月19日(火)

お問合せ 周東文化会館 ☎0827-84-1400

釜ヶ原神楽団

【山代神楽とは】

神楽とは元々、神様に奉納される舞楽のことをさす言葉です。山里の神楽の多くは、土地を守る神々に対して、鎮魂、五穀豊穡、災厄払拭などの意味を持ち、田植え前の春先や、稲刈り後の秋に執り行われます。毎年奉納のほか、地域によっては数年に一度、式年祭と呼ばれる特別な祭りが行われます。近世までは神職による神楽奉納が一般的でしたが、明治以降、その多くは里人に引き継がれました。現在山代地方に伝承されている神楽は、境を接する近隣の岩見（島根県西部）や安芸（広島県西部）の影響を受けながら、独自の文化を育ててきました。その総称を「山代神楽」と言います。

【釜ヶ原神楽】

釜ヶ原神楽は出雲神楽の流れを受けた縦笛と太鼓のテンポの速い八拍子の「山代狂言神楽」です。この神楽を保存していくために昭和45年より「釜ヶ原・大三郎神楽保存会」の組織を結成し神楽を伝承してきましたが、平成2年の保存会発足20周年を機に「釜ヶ原神楽団」に名称を戻しました。また、平成5年3月に「美和町指定無形民俗文化財」の指定を受け、保存伝承活動を進めてきました。現在は地元の釜ヶ原及び大三郎の2ヶ所の神社で毎年10月に交互に神楽を奉納し、また県内外の神社や、各地のイベント等でも公演を行っています。（平成18年の市町村合併に伴い、岩国市指定無形民俗文化財に指定替）

【神楽団の由来・沿革】

現在、主流をなす「山代狂言神楽」を舞い始めたのは明治の終わりから大正時代に本郷（当時の山代狂言神楽の伝承元）より習ってきたといわれています。近年、釜ヶ原の神楽が一番盛んであったのは第2次世界大戦（昭和16年）以前です。地元で柔道を習っていた若者が神楽も熱心に舞い、その荒い舞が近郷の人々の好評を呼んでいたといわれます。終戦後、神仏軽視の風潮の中で舞が少なくなりましたが、釜ヶ原の若者は戦後すぐに衣装や面などを揃え再興しました。しかし、昭和26年のルース台風により衣装の殆どを流出、損失して以来神楽の音が消えました。

昭和40年頃、長老の山崎藤吉氏（当時80歳）などの数人の古い神楽仲間が健在であったとき、青年・壮年10数人を集めて神楽保存会を作り、村おこしを始めました。それまで、神楽は持ち株組織で誰でも舞うことはできませんでしたが、当時の保存会の者は釜ヶ原と大三郎の全戸に呼びかけて誰でも舞子になれる制度にしました。また、大三郎には昔から別の伝統ある「太夫舞（神舞）」がありましたが、終戦後次第に消失し舞は影をひそめ、奏楽のみが残っていました。これらも神楽保存会に持ち込み、釜ヶ原神楽を中心に現在の神楽に伝承してきました。



恵比寿

恵比寿に扮し、豊漁（釜ヶ原の場合、豊作）や商売繁盛を祈る神事舞



大江山

都は、鬼の暗躍する「恐怖の都」となりました。源頼光は、古い師に『鬼の棲み家』を尋ねました。古い師は、『都から遠く北の方向にある大江山である』と答えました。頼光と四天王は、大江山へ鬼退治に向かいます。途中、神さまが現われ神さまは、頼光へお酒を贈りました。この酒は、鬼が飲めば毒になり、人が飲めば元気になるというものでした。大江山に差しかかると、涙を流しながら布を洗う姫に出会いました。都からさらわれて来た姫だったのです。この姫の案内で鬼の館へ入ります。酒呑童子は、この一行が何者か疑います。頼光は、日本の山々を修行して歩く山伏と説明して、神さまから授かったお酒を贈ります。酒宴の後、頼光たちは、酔った鬼たちと激闘して退治します。そして都へ凱旋します。

宮乃木神楽団

平成10年に、広島県広島市安佐北区飯室の野原八幡神社を御祭神として設立し、阿須那系八調子を源流とする、梶矢神楽団に師事を受けています。

神楽とは何か？を考え、儀式舞、儀礼舞、能舞の流れをふまえ、先人たちの築き上げた心意気を学びたいと考えています。

設立から15年を迎え、年間40回を超える出演依頼を頂き、感謝しております。

今後とも芸を磨き、見る人の心に残る神楽、また足を運んで頂けるよう日々精進していきたいと思っております。



滝夜叉姫

東の国の新皇を名乗った平将門（たいらのまさかど）は、天慶（てんぎょう）の乱で藤原秀郷（ふじわらのひでさと）・平貞盛（たいらのさだもり）の軍に敗れ去ります。平将門の娘・五月姫（さつきひめ）は、父の怨念を果たす為、貴舟（きふね）の社（やしろ）に「願」をかけ、満願と共に貴舟の神より妖術を授かります。五月姫は、名を「滝夜叉姫」と改め、父の因縁の郷、下総の国・相馬（そうま）の地に立ち戻り、多くの手下を従えて反乱を企てます。陰陽師・大宅中将光圀（おおやのちゅうじょうみつくに）らは、姫征伐の朝命を奉じ、下総の国へと向かいます。陰陽の術と邪心の妖術の激しい戦いとなりますが、滝夜叉姫の朝廷に対する復讐は成らず、無惨に敗れ去っていくという物語です。



八岐大蛇

出雲の国に暮らす足名稚（あしなづち）・手名稚（てなづち）老夫婦には八人の娘がいました。しかし毎年一人またひとりと大蛇に飲み取られ、七人まで娘を失いました。そしていよいよ八人目の娘が飲み取られる季節となり、老夫婦と八人目の娘・奇稲田姫（くしいなだひめ）は嘆き悲しんでいました。そこへ高天原（たかまがはら）から舞い降りた須佐乃男命（すさのおのみこと）が通りかかり、その訳を聞きます。命は、大蛇退治を決め、老夫婦に八塩折（やしおり）の毒酒を造らせ酒を入れた樽の後に姫を立たせます。やがて、どこからともなく大蛇が現れ、毒酒に映った姫の影を飲み干していきます。酔いの回るほどに暴れ狂い、しだいに酔い伏してしまいます。これを待ち構えていた命は、壮絶な戦いの末、大蛇を退治します。大蛇の腹を切り裂くと、一本の刀が出てきます。これを天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）と名づけ、天照大神（あまてらすおおみかみ）に捧げます。そしてめでたく奇稲田姫を妻とし、平和で豊かな出雲の里で暮らしていくという物語です。